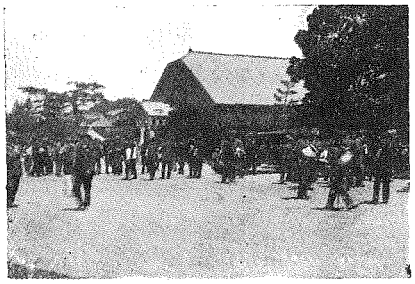

總會々場の景

廣島市の三日間

帝國鐵道協會總會紀行

一　記　者

○

昭和博覽會開催を期して四月下旬から廣島市に於て全國工業家大會を初めとし各種團體の會合が連日にわたつて開かれたが、其の最後をうけて帝國鐵道協會の總會が擧行された。

○

第一日の五月十日は清朗な天氣である、總會々場に宛てられた偕行社の新大講堂に集合した鐵道協會員は約七百名に達し、東京を主として全國各地殖民地よりの來會者まで一堂に會するの盛況である。開會に先ち場内すでに久濶を謝する談笑の聲に滿ちた定刻、國澤會長司會の下に開會を告げ太田書記長より會務の報告あり、次いで評議員の選擧は例により會長より詮衡委員を指名して詮衡された百餘名の評議員は直に會員の賛成を以て決定した、監事廣田理太郎氏は辭任を申出られたが多數の希望で重任となり、例の如く平穏裡に議事は終つた。

總會席上の講演は第一が、『廣島縣蠶の由來』と云ふ題で文學博士新見吉次氏が宣傳を兼た勞資協調の美風が蠶養殖組合の内にある事を趣味的に說き、次に『鐵道と自働車との分野及協調に就て』鐵道省運輸局長寛正太郎氏が、諸種の調査資料を以て有益な講演をされた。

偕行社内の庭園で中餐をなし、直に近くの昭和博覽會場見物に出た、さすがに廣島市が百萬圓を投じた丈けあつて地方的の博覽會としては充實したものである。

第二會場は比治山公園の見晴の良い山の上であるが登るに大汗をかく、其所には陸軍の參考館がある、第三會場は宇品町の海中に突出した小島に在つて、此所は海軍參考館や水族館で賑つてをる。

午後六時から廣島の名物たる羽田別莊の少女歌劇を見ながらの懇親會がある、市内見物で疲れた爲か欠席會員も大分あつたが、それでも主客合して四百名程の人で中々盛宴であつた。宴酣なる頃庭内に仕掛けた花火は臨席の人々を喜ばした。

○

第二日の十一日は午前九時廣島驛から特別列車に乘じ會員一同吳軍港を見學した、各工場内の大設備には今更驚嘆したが、何の工場も比較的靜かなもので一朝有事の日に活躍する壯觀さを忍ぶ位のものであつた。

此の日の中食は三萬八百噸の軍艦扶桑の上で一同が水兵食をしたのは痛快であつた。廣島の旅館で待遇が悪いと不平ダラ々々の紳士諸君が瀬戸引の剝げかゝつた洗面器の小型の食器へ、ボロ々々の半搗米一盛と、小間切のシチユー一盛とを强いられたのは一種の皮肉でもあつた。

然し海軍當局は水上生活の兵士の日常を赤裸々に味つて貰ふと云ふ眞劍な馳走ぶりであつた。

實際こんな食事も時には好いものである、喰べ切れない澤山の料理を箱入りにして出されても結局無駄になるばかり、土地の人には風呂敷包も適するが多數會員には用をなさない。

○

第三日の十二日は市内見物である。まづ第一に遺墨展覽會を見る。在るわ々々々、此所はさすがに堀出物と云ふか、平素斯んな古物に接しない我々には全くの珍寶揃である。頼山陽に關する遺墨を初め宮物の寶物や淸正の書など到底面白いものがあつた。

次は淺野公爵家の泉邸見物に行く、さすが大大名の庭園である、池水と、丘陵と、樹林と、亭屋と何れも現代を離れた、遠き昔の趣味に溢れたものである。高速度ではあつたが之れもよいものを見たと思つた。

次は泉邸の隣の觀古館を拜見した、淺野公初代からの武勳と、大名生活の趣味の一面を代表する樣な武具、日常用具が完全な建物内に整然と陳列されてゐる。

正午はニギ園の大華樓で廣島市附近の各鐵道會社其他の歡迎宴に招待された。此邊になると國澤會長が會員を代表しての挨拶も中々輕妙になつて來る。例に依り日本料理に藝者の踊り一同歡を盡して次の見物や、別派の會合に出掛ける。

夜はまた羽田別莊で盛んな招待宴が開かれ先夜に優る少女歌劇や餘興があつた。

○

廣島市が中國第一の都市である事は兼て聞いてゐたが、今眼前に道路の鋪裝されてをる事、橋梁の近代的設計になつてをる事、水道、下水、電車、自働車等殆んど完備してをるのを見て成る程とうなづいた次第である。それに市内に流れの良い太田川が數條海に注いでゐる事は市内を淸明に印象するものであつた。

我々は三日間の廣島に名殘を惜みつゝ十三日の朝岩三旅館をたち歸京の途についた。

尙ほ二百餘名の會員は十三日は宮島見物、十四日以後は四國見物、而して十七日神戸に豫定通り解散したと云ふ事である。